



第14回アジア地区国際家政学会議 (ARAHE) マレーシア大会報告

(社) 日本家政学会 国際交流委員会

標記国際会議は、2007年8月6日(月)～9日(木)に、マレーシア国 Petaling Jaya 市の Eastin Hotel で「Reorienting Human Capital in Home Economics: Meeting Current and Future Challenge」のテーマのもとに開催され、10カ国から229件の研究発表申込があった。以下に主な内容を記す。

歓迎レセプション・開会式

歓迎レセプションは、8月6日(月)午後6時過ぎ、地下1階 Ballroom にて、多文化国であるマレーシアを象徴する多種の郷土料理がふるまわれる中、終始自由な雰囲気で行われた。

開会式は、8月7日(火)午前8時30分、地下1階 Ballroom にて大音量の音楽と共に開始された。MHEA (マレーシア家政学会) 会長 (Rusinah Joned 氏)、ARAHE 会長 (澤井セイ子氏)、IFHE 会長 (Lilha Lee 氏)、ISM (Institut Sosial Malaysia) の Director (Mohamed Fadzil Bin Che Din 氏) から開会の挨拶、Y. Bhg. Tan. Sri. Dato' Napsiah Omar 氏からは挨拶と開会宣言がなされた。厳粛な中にも時に笑いを誘う和やかな雰囲気のもとに、各代表がそれぞれの立場からアジアや国際社会における家政学の意義と課題や、首都機能移転に代表される先進国化計画によって変わりつつある最中のマレーシアにおいて国際会議を開催する意義について語った。



晩餐会・カントリーパフォーマンス

8月8日(水)午後8時45分、着席の中華スタイルで行われた。会場が暗くなり、スクリーンにはディズニーの welcome 映像がスタート。ろうそくの映像が引き画面になったと思うと、いつのまにか現れた5人のウェ이터が各テーブルにキャンドルサービス、という粋な演出で始まった。次々に運ばれる中華料理に舌鼓を打つ中、カルチュラルパフォーマンスが開始。中国風、インド風、マレー風、先住民風等、マレーシアに伝わる各文化の踊りが、会場前方をも走り回るダイナミックさで次々と華麗に繰り広げられた。次に、参加各国からのパフォーマンスとなり、1番である日本は着物を着た4名による扇での踊りと共に「上を向いて歩こう」を披露。日本は参加者が多く、全員が壇上に乗り切れない程であった。その後、インド、シンガポール、韓国、フィリピン、台湾、タイからの歌や踊りがあり、会場を巻き込む楽しいパフォーマンスが繰り広げられた。最後に次期役員と次期開催国インドの紹介等がなされ、会は夜11時半まで盛大に行われた。(椋山女学園大学 室 雅子)

基調講演・全体会議

Opening Ceremony 後の基調講演は、開催国マレーシアの En Mohd Yazid Bin Awaluddin 氏 (Department of Skills Development, Ministry of Human Resources) によって、「Enhancing Human Capital in Vocational Training: Malaysia Experience (Skilled Workforce Development in Malaysia)」のテーマのもとに行われた。

マレーシアでは独立後、開発振興が国家政策として段階的に進められており、現在は2010年を目途に第9次マレーシアプランが実施されている。その中では、人的資本の開発・強化が重視されており、知識やアイデアを生む能力の向上、「一流意識」の醸成も掲げられている。続いて、統計資料を示しながらマレーシア国民の年齢構成や労働人口、雇用率および産業や経済の状況について説明があった。そして行政、企業、人材育成者などの各立場から、人的資本開発における課題が論じられ、国内のスキルトレーニングの整備

(施設やプログラムの認可, スキルの基準や認証制度, 法的整備など) について解説があった。

基調講演に引き続き, 以下の3名による Plenary Session が行われた。

現 IFHE 会長の Lilha Lee 氏 (韓国) は, IFHE の視点から, 変動する社会における家政学に関わる人的資本の重要性を論じた。今日, 持続可能な開発のための人的資本を育成することが急務であり, “IFHE Position Statement: Home Economics in the 21st Century” は, 家政学の特質や専門性を明確に示しており, 変動する社会の中で家政学において人的資本を育成する上で有効なガイドラインとなると述べた。

続いて, 現 ARAHE 会長である Seiko Sawai 氏 (日本) は冒頭, 家政学における人的資本の意味を問い, 日常生活を総体的に捉え, 人々の生活の質の向上に資するよう研究成果を活用することの重要性を述べた。そして ARAHE 創設 20 周年記念誌を紹介しながら, 人的資本開発における ARAHE のこれまでの取り組みおよび今後の課題について論じた。

3 番目の Hapsah Nawawi 氏 (マレーシア) のスピーチには, 残念ながらプログラム進行の都合上, 十分な時間が提供されなかったが, 氏は, 家政学における人的資本の課題として, 家政学の各分野の結合を強化すること, 個々の潜在能力を強化すること, 優れた人的資本または起業家を創出するために専門知識を向上させることを挙げられた。(山形大学 大森 桂)

カントリープレゼンテーション I

カントリープレゼンテーション I では, インドの Ela Dedhia 氏の議長のもと, 日本, 韓国, タイ, シンガポールの4カ国から, 会議テーマ「Reorienting Human Capital in Home Economics: Meeting Current and Future Challenges」に即し, 家政学が社会において果たすべき, そして求められる役割について各国から紹介された。

Yukiko Kudo 氏 (文部科学省, 日本) からは日本の教育改革の現状において家政学に強く求められる役割, すなわち, 共生と自立を目指した社会の構築, 将来的発展に必要な伝統的な文化の尊重, gender equality の推進といった3点が提示された。

シンガポールからは将来のシンガポールの人的資本発展のための礎石として, 教育における家政学と健康促進プログラムの実践の紹介がなされた。問題解決学習, ‘Teach Less, Learn More’, 生徒主導の商業活動等の教育活動や, 健康促進プログラムにおける家政

学の果たす役割があげられた。

タイからは少子化等, 人的資本の現状から家政学に求められる変化と挑戦を, 幸福を中心に生活の質の管理といった Well-Being, バランスのとれた精神や身体といった健康的な生活, 適切な職業, 安全な環境といった豊かな生活の3点を三角形に囲んだ構造図等が提示された。

Jinkyung Chang 氏 (韓国) からは家族の機能を強化することを目的に設立されている「健康的な家族サポートセンター」の活動実践や課題が報告された。多様化する家族の抱える課題に対応して, セラピーやキャンプ, ディケアサポート等が積極的に行われている様子が紹介された。

各国の状況は異なっている, 変化する社会や教育の現状に即して, 家族を中心とした生活の充実に果たすべき家政学や家政学者の役割の大きさは共通であると再認識させられた。(山梨大学 志村結美)

カントリープレゼンテーション II

大会2日目の午後, カントリープレゼンテーション II が行われた。予定されていた香港, フィリピンからの報告は行われず, 台湾, マレーシア, インドの順に, 大会テーマに沿って3カ国が発表した。

台湾は, 家政学 (Home Economics) という名称が使われなくなり, 各専門領域に分化され異なるカリキュラムが行われているという現状と, 家政学に関連する分野を学んだ者の進路の現状について報告した。教員やファミリーライフ・エデュケーターをはじめそれぞれの分野での活躍の場がある一方で, 保育士や教員の就職先が少ないこと, 公的な専門資格の不足, 低賃金といった問題点があることが指摘された。今後, 家政学を学んだ者が, 家庭経営や介護のサービス事業, 家庭裁判所の調停員, カウンセラー, 生活指導員, ウェディングプランナーなど様々な職業で活躍していくことを提案した。そして, 台湾を紹介する華やかな VTR が上映された。

マレーシアは, 製造業からサービス業へと移行した産業構造の変化と職業教育の現状に関連する報告であった。サービス業の中でも特に, 接客業に関する職業教育の場の整備が進められているという。ホテル業とケータリングに関するコースと観光に関するコースが設けられ, それぞれ3年間の課程 (Diploma Course) と2年間の課程 (Certificate Course) があり, 体系的なカリキュラムと評価基準が紹介された。具体的な学習内容についても, 写真を交えて紹介された。

第 14 回アジア地区国際家政学会議 (ARAHE) マレーシア大会報告

インドは、自由主義化が進展していくインド社会の現状と課題についての報告であった。社会の変化を受け、政府では、教育機会の拡充と質の改善、金融改革、農村地域の経済的基盤をつくることの3点に重点をおいているという。報告では、子ども中心の教育、女性中心の家族、人間中心の発達、知識中心の社会、革新中心のインド、これら5つ全てがまとまって行われていくことの重要性を指摘している。そして、政府・企業・教育・研究の4者の協力と調和が家政学においても必要であると結んでいる。

カンントリープレゼンテーションⅡでは、各国の経済産業事情によって重視される人的資本が異なり、家政学に求められる教育に違いが出ている点に大変興味深いものがあった。(國學院大學栃木短大 永田晴子)

シンポジウム

開始時間が遅れたためか討論の時間はなく、3名のシンポジストの報告は、それぞれの専門的立場から本会議のキーワードである「人的資本」(human capital)あるいは「未来への挑戦」(future challenges)にアプローチする興味深い内容であった。報告の概要は次の通り。

Dr. Kaija Turkki 氏(ヘルシンキ大学教授)の報告は「家政学をいかに統合するか」(The Integrative Image of Home Economics—from theories to applications)をテーマに、フィンランド家政学の歴史、家政学の役割、現代及び未来への社会貢献の3つの視点から議論し、新しい家政学のフレームワーク(統合理論と教育による実践)を提案するものであった。自然・文化・社会環境と人間(人間として、市民として、消費者としてあるべき姿)との相互作用を日常生活活動(human action everyday life)に統合するという氏の持論である「日常生活の理論」を余すところなく展開し、さらに、学校における家政教育のフレームワークも提案している。

粕谷美砂子氏(昭和女子大学准教授)らの報告テーマは、「第二次世界大戦以降の日本の『食農教育』における人的資源—ジェンダー視点からの検討」であった。日本の現代の「食農教育」における人的資本に関わる資料と統計データを用い、ジェンダー統計として加工・分析して状況を把握し、課題を明らかにしたものである。食農関連分野の人的資本の男女の割合には偏りがみられ、報酬が高い職場に男性が多く、報酬が低い職場やボランティアの活動分野に女性が多くなっている。女性の職業的自立が可能となるような「食農

教育」の推進が必要であると結論づけられた。(以上の概要は、粕谷氏に依頼してまとめていただいた。)

Dr. Jarian Masud 氏(Putra Malaysia 大学)の報告は、「わくわくパッケージを用いた人的資本への投資」(Human Capital Through Stimulation Package)をテーマとした実践報告である。それぞれに異なる玩具や道具(materials)が詰まったパッケージをコミュニティへの投資と同時に子どもの発達を促すツールとして考案し、65世帯に1カ月貸し出した。その目的は、限られた資源(パッケージ)を共有して効率的な分配を学ぶことや、道具を使うことで子どもの心身の発達を促進することにある。

(金城学院大学 中森千佳子)

研究報告(テーマ4 子ども、家族関係)

口頭発表へのエントリーは全部で17件、90分のセッションが3回行われ、研究1件あたりの発表時間は質疑応答をあわせて約15分と、コンパクトなものであった。国別内訳は、タイ6件、韓国4件、マレーシア3件、日本2件、台湾1件、インド1件であった。

口頭発表では、大学生を対象に、家族・家庭要因と社会適応や学業達成度などの発達態様との関連に注目した研究が多かった。具体的には、社会適応における親からのサポートの重要性(タイ)、家庭生活スキルとクオリティ・オブ・ライフとの関連(タイ)、良好な家族関係を築いている学生はストレスが低いこと(タイ)、セルフ・エステームと良好な親子関係は学業達成度に影響すること(マレーシア)、男子学生の喫煙行動と家庭環境との関連(マレーシア)などが報告された。

母親を対象とした研究では、メンタルヘルスや子どもの養育態度における夫婦関係の重要性(日本)、嫁姑関係における夫からのサポートの重要性(台湾)、アトピー性皮膚炎の子どもを持つ母親の育児ストレス(韓国)などが報告された。

子どもを対象とした研究では、新生児の体重は子どもの生まれた月によって差があること(インド)、母親の養育態度が幼児のGratification abilityの遅れに関連していること(韓国)、栄養過剰と子どもの行動発達との関連(タイ)などであった。

ポスター発表は全部で22件、日本8件、韓国8件、台湾5件、タイ1件であった。韓国からは、母親の養育態度と子どもの感情表現、祖父母による子育てのケーススタディ、女性の家庭におけるリーダーシップと家庭生活満足度、母親の幼児教育に対するニーズ、幼児

の学習準備の度合いとパーソナリティーなどが、台湾からは父親が軍隊に勤務する家庭の父親不在の問題や、ペアレンティング教育の有効性、“grandfamily”の増加と祖父母による子育て、キリスト教の家庭における親子関係と宗教の影響、学童保育についての意識調査が、タイからは若者の母子関係と社会適応能力との関連についての研究が発表された。

口頭発表、ポスター発表ともに、子どもの成長、発達における家族・家庭要因の重要性を強調したものが多く、良好な家族関係の構築は各国共通の課題であるとの思いを強くした。

(お茶の水女子大学 蟹江教子)

研究報告 (テーマ7 食物、栄養、健康、ツーリズムとホスピタリティ)

この分野は、口頭発表が8月8日の午後、ポスター発表が8月7日午後、8日午前の2回にわたって行われた。表題のようなテーマのため、栄養学や食生活の内容に留まらず、幅広い内容の研究が報告された。

口頭発表では11件の発表が、日本、インド、タイ、香港、台湾の5カ国から行われ、インドからの報告が6件と最も多く、日本からの報告は1件であった。発表内容は国の食文化、米の比較研究、食教育の役割、ホスピタリティ教育、青年の栄養摂取状況、食生活の地域間比較研究・授乳における影響など多彩なものであった。ある研究発表で、キーワードの解釈に対して意見交換がなされたが、国際学会ゆえの言語・文化の違いによる捉え方の相違を感じ、解決の難しさと共に、言葉を根本から捉え直す素晴らしい機会だと感じた。会場はレセプション等も行うような大きい部屋だったため、空席もめだっていた。より活発な意見交換が行われれば、さらに有意義な時間になったように思う。

ポスター発表では、33件のポスターが展示された。10のトピックス、総数150件のポスターの中で33件という数は、このテーマに対する興味・関心の高さを表していた。日本からは12件(他国との共同研究含む)の発表があり、韓国とともに、発表の多くを占めていた。日本人研究者による研究内容は、調理学領域・栄養学領域・食習慣などが多かった。どれも色や写真を効果的に使い、見やすく、理解しやすいポスターが多かった。熱心に写真をとったり、質問をしたりしている姿も多数見受けられた。

口頭発表、ポスター発表を通じて、同じテーマ領域とはいえ、注目されている分野の違いを感じた。それだけ、家政学が自分たちの生活に密着していることを

再認識させられた。

(千葉大学(院生) 佐野あゆみ)

研究報告 (テーマ8 アパレル、テキスタイル、ファッションと商品計画、化粧術)

口頭発表として、8月8日(水)16:00から研究発表があった。

地域的な天然染料による染色法や、その製品化、また、ボディサイズの規格化などのテーマでは発表者と近隣諸国の参加者との間に活発な意見の交換が行われ、その地域では共通の課題であることが窺われた。発表テーマは以下の通りである。

○タイ国内地方の絹染色 (Sarunya Kasembunyakorn 他)、○ボディー・サイズ タイ規格 (Srikanjana Phonasa 他)、○Integrating Artisanal Paper-Making in Fashion (S. Ramsamy Iranah 他)(当日欠席)、○Creating an Awareness Campaign of Human Diseases through Textile and Fashion (S. R. Iranah 他)(当日欠席)、○Ocimum Sanctum, Linn (Tulsi の葉) による木綿と絹の染色 (Ela Dedhia)、○Sa 糸の手紡 (Sakorn Chonsakorn)、○北部タイ特有のテキスタイルにおけるタイの智慧の潜在資源 (Kajijarus Piromthamsiri 他)、○ドラム型洗濯機のすすぎ条件による木綿織物の機械的感覚的特質について (Haewon Chung, Mi-hyun Sa)、○21世紀ファッション商品におけるミニマリズムの研究 (E. S. Lee, E. J. Lee)、○ファッションショッピング技能による販売員態度に対する消費者評価と韓国大学生に対するファッション関係の研究 (E. S. Lee, Y. Y. Jung)、○韓国婦人の美的表現の時代的变化に関する研究ボディデザインに焦点をあてて (E. S. Lee 他) ポスター発表は11件であった。

(日本女子大学 田中俊子)

研究報告 (テーマ6 家庭経営・経済、テーマ9 住居・環境開発)

口頭発表では、まず残念であったのが、プログラムの変更である。配布プログラムの最初の発表者である大竹氏が別室での発表となり、この部屋の最初の演者は久保氏であった。ともに大変興味深い発表演目であっただけに、聞き逃した参加者もいたのではないかと思われる。その久保氏の発表は、共働き夫婦が双方の親や保育園の手助けを受けつつ子育て・家事を行っている日本の実態が、4つに大きく分類され報告された。

2番目はタイの若い研究者より、Kasetsart 大学の18歳から24歳の女子学生の学習態度・取り組み、時

第14回アジア地区国際家政学会議 (ARAHE) マレーシア大会報告

間管理, 学習目標到達度の関係を, カイ二乗検定など統計的手法を用いて考察された結果が報告された. プログラム3番の韓国のグループは, ポスター発表タイトルの誤記載であった.

4, 5番目は地元のマレーシアのグループが, 2件続けてChild Care Center (CCC) に関する発表をした. マレーシアでは両親が働いている間親族 (祖父母など) やベビーシッター, メイドが子どもを世世することが多かったが, 近年 CCC の需要が増してきている. そこで, 利用者 (両親) からの聞き取り調査や現地調査などから, 子ども達を安全に過ごさせるためのプログラムなどについて考察された. また, 企業併設 CCC の可能性, pre-school だけでなく after-school program も必要であることなども議論された.

最後の演題は愛媛県におけるタロイモの調理と物性に関してであった. 元来食物栄養系でエントリーされていたタイトルであったがなぜかこの会場での発表となっており, 関連の研究者がいず気の毒であった. それ以外の演題については, 各国の事情に対する質疑応答など活発に行われた.

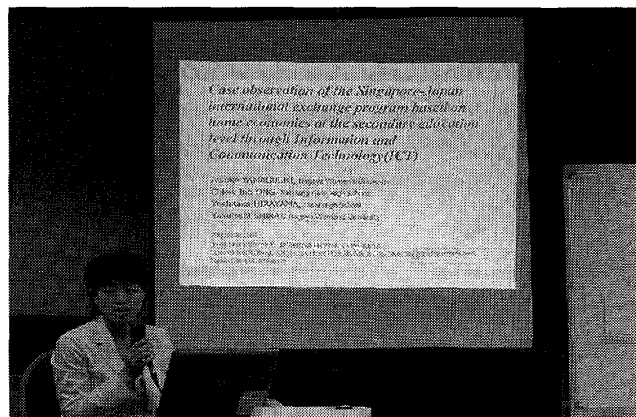
ポスター発表 (テーマ9 住居および環境開発関連) では, 20 件のポスター発表のうち 14 件が日本から, 5 件が韓国から残りのひとつが台湾からの発表であった. また, 15 題が住居関連, 残りの 5 題が環境や都市開発関連のテーマであった. 全体を通して地域色豊かで, バリエティに富んだ発表であった. 衣・食・家庭経済などと比べて参加者が少ない分野であるので, 今後各国からの積極的なアプローチを期待したい. 今回は掲示場所とスペース, 発表時間など日本からの参加者には疑問の残る運営であり残念であった.

(昭和女子大・院 中山栄子)

研究報告 (テーマ10 教育, コミュニティ・サービス)

教育およびコミュニティ・サービスでは, 口頭発表 8 件とポスター発表 16 件が行われた. ここでは口頭発表について報告したい.

日本からの報告のひとつ, 山口, Ong, 平山, 白井 (名古屋女子大ほか) は「情報コミュニケーション技術を用いた中等学校レベルの家庭科のシンガポール・日本の国際交流プログラムの事例」であった. 家政学・家庭科・食生活・生活文化の情報, 卒業研究などを, E-mail, ビデオ会議, ホーム・ページ作成を通じて交流した結果, 生徒・学生のモチベーション・国際理解・社会的スキルが向上し, 教員間の相互学習が促進され



山口氏他の発表: photo by 白井靖敏

たことを明らかにした.

筆者と山口氏 (鹿児島県短大, 名古屋女子大) は「日本における家政学と家庭科教育の現状: ジェンダー問題と教育改革」で, 日本におけるジェンダー問題解決の立ち遅れ, 家政学の役割と可能性を論じた.

以下, 各国からの報告を紹介しておく. 授業に関する発表として, 「学習障害を持つ就学前児童のための授業: 概念枠組み」(Adiyodi, Cheong: マレーシア), ハーブとスパイスの実習授業から「人種間の調和を学ぶための別のアプローチ」(Fong, Foo: シンガポール), 「ティーンエイジャーの家庭環境, 自信, 学習スタイル」(Tucar, Caipang: フィリピン) があった.

エクステンションに関しては, 食品生産・加工を通じた「QOL 向上のための家政学: Ubonrachatani 省の事例」(Saratapun, Hongdachart, Rungsayatorn: タイ), 自尊感情とコミュニケーション・スキル向上に寄与した「韓国における離婚家族のティーンエイジャーのための集団カウンセリング・プログラム開発に関する研究」(Kim, Chang: 韓国) の報告があった.

高等教育に関しては, 親の教育レベル, 美・手入れ・家事・裁縫への関心, 教師・親・仲間からの刺激と「学生の家政学・生活技能科目の受容レベル」(Rubi: マレーシア) の関連が明らかにされた.

口頭発表では予定プログラムの約半分が当日キャンセルされた. とはいえ, 討論時間がより多く確保され, 意見交換が活発に展開される結果となった. ポスター発表の掲示時間は口頭発表と重複しており, しかも短かった. 今後の工夫が望まれる.

(鹿児島県立短大 倉元綾子)

エクスカッション

最終日の午前中は, バス 5 台を連ねてのエクスカ

ション。まずは、クアラルンプール・クラフト・コンプレックスに向かった。クアラルンプールで最も賑やかなビジネス地区である「ゴールデン・トライアングル（黄金の三角地帯）」にあり、3.7 ha の土地に広がる観光名所。マレーシアの様々な工芸品の展示、デモンストレーション、また工芸品制作の体験もでき、ショッピングも楽しめる。滞在時間は30分と短時間であったが、多彩な美術工芸を楽しむことができた。

次は、ゴールデン・トライアングルの真ん中に位置するKLCC地区へ。高さ452mを誇るツインタワーを見上げるフォトスポットで写真撮影。1998年の完成から2003年までは世界で最も高いビル。南国の光のなかに聳え立つガラスと鋼鉄の建物は、マレーシアの急速な経済成長を象徴しているようであった。

ツインタワーを左手に見ながら、クアラルンプールで最も賑やかな繁華街といわれるブキッ・ビンタン地区に。高級ブランド店の入ったショッピングセンターやカフェが立ち並び、マレーシアの銀座といったところ。そのままバスで通り抜けチャイナタウンへ。中国の下町に入ったかと思うような漢字の看板も鮮やかな古い町並みは、露店や屋台が並ぶ夕方から喧騒とした様子を見せるようだが、午前中はまだ閑散としていた。チャイナタウンを南下し、王宮（イスタナ・ヌガラ）へ。入場はできないが、門前で馬に乗った衛兵と写真撮影ができる。順番に馬と一緒にカメラに収まった。王宮から西北へ向かい、マレーシア随一といわれるナショナルミュージアムを左手に見ながら、国立モスクへ。1965年に完成したモスクは東南アジアで最大規模のモスク。伝統的なドーム型の屋根ではなく、貝殻を思わせる幾何学的な波状屋根が特徴でイスラム現代建築の代表作といわれる。高さ73mのミレットが聳え立ち、さすがイスラム教の中心地だと納得させられる。最後は、独立広場（ムルデカ・スクエア）へ。100mの掲揚塔に国旗がはためくマレーシア独立の記念すべき場所。緑の芝生で整備された広大な広場に立つと、植民地支配から独立を勝ち取った往時のマレーシアの人々の熱い思いが伝わってくる。周囲にはイギリス統治時代の歴史的建造物が数多く残され、マレーシアの歴史を知るには欠かせない場所である。

約3時間半のエクスカッションながら、150万人が暮らすマレーシアの首都の代表的な場所に立ち寄り、歴史と文化、そして人々の暮らしに触れることができた。

（千葉大学 久保桂子）

理事会・評議会報告

大会の開始に先だつ8月5日午後から理事会が開催された。理事会では、ARAHEの運営に関する諸課題を整理し議論を行い、議決権のある評議会に諮るまでの議題の詰めを行う。この委員会は、会長、2名の副会長、事務局長及び副事務局長、財政担当、会誌担当、2名の会計監査、IFHEのアジア地区理事、IFHE会長、東地区理事、東南地区理事、インド地区理事の15名によって構成される。今期の日本からの委員は会長、財務委員、事務局長である。

理事会の議論を経て後、各議題は決議機関である評議会に諮られることになる。評議会は実行委員および団体会員の代表者より構成されている。日本の団体会員は日本家政学会、日本家庭科教育学会、横浜国立大学家政教育学会、日本エコロジー研究所の4団体であり、団体議決権21のうち4票を持つ。

大会会期中毎日開かれた会合には、事務局を担当する日本家政学会国際交流委員も終始そこに参加して議論の傍聴・事務局としての対応にあたった。ARAHEの持続的な活動を支える上での大きな課題として事務局機能の継続・持続性があげられると思うが、この点で日本事務局の的確かつ丁寧な対応は各国代表の委員各位から高い評価を得た。

以下、紙面の許す限り、今回の委員会における議題を述べる。初めに事務局からは、現在の会員数の確認、新規に立ち上げをしたARAHE Web Siteの説明、事務局の一年間の活動状況の報告があった。次いで、編集からは会誌の発行状況 投稿規定の確認、IFHE担当からは活動報告、2008年スイス大会の予告、財政担当委員からは会計収支・決算予算報告、監査報告が行われた。従来7月1日～6月末であった会計年度は1月1日～12月末までと変更する案が議決され、それに伴って予算決算枠組も変更となった。

ARAHE規約の改訂にあたっては、ARAHEはIFHEの下部組織であるという位置づけの明確化、カテゴリー別にみた会員の属性と資格・特権の確認が行われて、終身会員の会費は、これまでの200ドルから300ドルへと一定の猶予期間をへて値上げされることになった。委員会の最後には、次期会長の選挙が行われ、澤井セイ子現会長の留任が決まった。なお、今回の大会開催候補地としてフィリピンとインドが名乗りをあげ、選挙を経て第15回のアジア地区国際家政学会議はインドでの開催となった。

（国際交流特別副委員、文部科学省 工藤由貴子）